

Title	故新城新蔵博士と事變下の支那文化
Author(s)	荒木, 俊馬
Citation	懐徳. 1938, 16, p. 17-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88998
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

故新城新藏博士と事變下の支那文化

荒 木 俊 馬

局 然科學界及び教育 k 去る八月一 於て 特に大きく感ぜ 日 午前 界が Ŧī. 時、 5 個 新 れるやうに Ø 城博士 偉 大なる人物を失つた が 思 戦亂下の は れる。 南京 事は言ふ迄もな Ø 病舍に客死 せら $\epsilon_{\mathcal{V}}$ が、 ħ た。 此 ح の損失は我が れ ĸ よつて 國 我が 現 國 胩 Ø Ø 自 胩

野 八月十 村 直 邦 日上海 炒 將 0 弔 中 辭 部 小學校に於て舉行せら Ø 節に れた自 然科學研究所葬に於ける支那方面艦隊海軍 一特務部 長

携 將 險 今次事 キ ---ラ忠 ニ永遠 信 而 = 暴 念 ァ レズ、 露 變 夙 ヲ 有 シ = 1 日 東洋 ッ 勃 シ 本國 其 已 ッ 發 ノ依 研 = 永 = 民 究ヲ 際 功 遠 囑 ラ以 成 シ 1 續 平 ヲ テ IJ 承 テ 名 和 ケ モ ケ 鑑 以 敢 遂 ヲ 身 ŀ 然 顧 テ ゲ 我國 ヲ ス 戰 タ 念 亂 挺 w jν 乜 老 . シ 科 ラ = 1 テ 學者 足 上 齡 V 海 其 w , 戰 身 Æ 1 = ナ 後稍 崇高 踏 目 ノ ヲ ナ Ē Æ 的 y o Æ ナ 止 顧 ヲ ス jν 達 -~ ₹ 加 態 v y. ズ ス 卒 バ 度 所 jν フ 散逸 先渡 員ヲ jν ヲ = = 中 ハ セ 先 外 督 支 實 \sim 生. = 勵 シ = 宣明 ŀ テ 日 ハ シ 此 Ż 支 テ ス 研 新 jν ν 1 セ 貴重 間 ラ 究 ガ 生 寸 實 文 ν 所 化 ナ 時 ヲ 現 Ø り。 死守 jν ŀ = 1 學 雖 提 邁 術 其 携 æ シ 進 日 資料蒐集整 陸 , = セ 剛 夜 海 ラ 在 軍 毅 生. ŋ v 沈 命 ŀ Þ ŀ リ 。 着 , 1 1 深 理 提 ハ 危

德

八

4 ナ 京 ヲ. 完 二於 大 リ_。 = フシ 業 期 待 テ 誠 東洋平 職 當 ス 男子 事 jν = 所 殉 セ 甚 和 ラ セ , 本 大ナ ラ ν 1 基 懷 w 只 管 n 礎 ŀ 斯 ヺ 謂 其 Æ , 定 業 フ) ァ メ 可 最 1 完 ŋ ン シ。 後 成 ガ 9 シ = = 爲 令 jν 拘 努力 = ャ ャ ラズ رر 皇 IE 先 軍 = 也 卒然 武 ラ 生 ハ 連 1 人 v ŀ 識 戰 , ッ 見一 戰場 ッ シ 連 7 テ 勝 薨 俟 將 IJ = 去 斃 シ ツ. = 可 際 セ 敵 w 不圖 ラ n キ 1 w Æ 死 ŀ o 命 等 Æ , 誠二 多 極 ヲ シ ク 制 暑 ク 哀惜 我海 吾 病 セ 等 魔 ン ノ念ニ 軍 ŀ 1 ノ冒 <u>.</u> 敬 ス。 於 慕 ス 堪 テ 此 措 所 モ 7 1 ŀ ズ 空前 今後 能 ナ y. ハ と 更一 首 ザ , あ 戰 都 w

先

果

處

南

施設 破 0 聖 壊 今次 ع 戰 4 Ø 雖 で W 事 も懐 ある。 が 變 爲 は め 牲とするは 0 言ふ迄もなく 勿 論 攻 戰 撃で 爭 止 b は 無 事 非 文那 を得 常 o El 手 段で 낊 不 な 法 億 $\epsilon_{\it f}$ ある。 所で Ø 悪 逆 民 ある。 衆 Ø 從 蔣 を相手とし 0 政 7 權 用 を膺 兵作 7 懲 0 戰 打 戦争でもなけ **上** 倒 0 し 必 て 東亞 要 0 爲 永 遠 れば、 め K Ø 平 は 支那 和 如 を 何 五 確 K 干 貴 立 年 重 世 なる Ø ん 文 が 文化 爲 化 を め

た

が

眞

'n

同

感

Ø

外はな

CJ

下 年 IE 義皇軍 然し、 0 Ó 苦 現 心 膊 の名 戰 研 局 K 究 鬭 暑に 於け 0 直 業績 後 も關 る 0 我 混 なりが跡もなく亡び去るの 亂 が國 する事で、 K 乘 Ø 學者 でて占 の任務 此 領 れ等を整理 地 城 6 ある』 内に於ける支那 保護して散逸を防 は文化人として見るに忍びざる所である とは新 城 五千 博 士 年 Ø ぐぐの 切 の文化の 實 なる は、 抱懐で 記念物なり、 壆 國 致、 あり、 國 また 支那 家 0 總 2 諸學 ならず、 動 · 者多 なる 制

主

張

でもあつた。

そ

れ

にして

も武人の積極的活動に比して知識

人の

如

何

K

躊躇消極的なる事

ょ。

事

戀

突發後、 切 齒扼腕、 博士 一の熱血 は遂にこれを坐視する事能はず、 老軀を顧みるいとまも無く身を挺し

老 Ø 將 に至らんとするを知らざりし て自ら立

た

れ

た。

歌つ

て日

その人のごと行かんとぞ思ふ

爾 標本や歴史參考品の逸散紛失を防止し、 生や教育機關の復 來、 或は北京に或は南京に、 興に心痛盡力せられたのであるが、 事 實上東奔西走南船北馬して、 これが保護管理の爲めの 今回も南京に於ける古文書、 戰後に於ける支那諸大學諸研究所の 關係調 査 團を指揮督勵して、 書籍、 自然 科學 烈 日 再 炎 0

熱の 極 Ø 老 め 南 て 驅 惡 K 京 城の は 性 餘 Ø 內外 疫 ŋ 魔 ĸ を馳驅して居られた。 ф は 僅 重 D 過ぎたので 週 間 K あらう、 L Ē 博 されど戦亂下の南京は事 士 0 七 生命 月廿 を 四 奪 日 って 發 病 仕 以 來、 舞 つった。 實瘴癘 闻 仁會病 真に 0 哀悼 地 院 で、 0 Ø 懇篤なる療養 極 其 みだけで の激務は六十六歳 はな も空しく

正 K 武 人 Ø 戰場 K 斃る ٧ と等し ػۣ 壯 烈鬼神 を哭せ じ かるも Ø が ある が、 古人の謂 ~ る『斃而 後已』

とは IE. K. 先 生. 0 場合の事であらう。

先 生は 偉大なる自然科學者であつた。 元來科學者は往々にしてコス æ ポ ŋ Ŋ か的 な思想 k 醉 然 V, 科學 或

者に は叉極端な個人主義に陷り、 して先生ほど忠君愛國 Ø 熱情に燃えて居た人物は尠からう。 動 もすれば天下國家を忘れ勝ちになる傾 畏れ 多 向 (J が 事 無 で (J は で ある は な が () が、 自

Little .

=

明 世 治 5 九 る のが F 先 0 牛. 御 0 製 日 は 課 先 Ó 牛. の最も愛誦 つで あつ たし、 せられ 叉、 た所 で、 五. 箇 毎朝眼 條 0)御誓文: を醒されるや、 は 先生 の常に そ 服 Ø 幾 膺 臣 2 か B を朗 れ た 指 K 導 ځ 原 詠 理

明 堯舜孔子之道。 盡西洋器械之術。 何止富國。 何止强兵。 布大義於四海 而已。

であつた。

踏 般 先 唱 ᆂ の支 生. は幕末の英傑横井 み止つて せられ、 rE 那偏 ど支那に 愛者 上 東洋永遠の 海 Ø 自 對 理解 然科學研究所 して大なる 小楠の詩であるが、 平和 や愛情で の為めに専心せられたのも此の 理 はなく、 解と愛情とを有した を死守せ られ 先生 常に我が た の理想もまた此 如きも愛國 日 本 人は古來 の立 理 の熱情と東洋永 場を忘れる事 想に の精 無からうと思は 基くものである。 神に外ならず、 が 遠 無 0 れ か るが、 平 0 先生が た。 和 Ø 自然科學者とし 空襲下 理 そ 日支提 想とが れ も決して Ó 焼き高 混 Ŀ 然 海 ح K

憾であつて、 10 憂へて居られ 古人は 『天 下 悲痛 た先生が、後れてすらも樂しむ事が の憂に先ちて憂 の情 に先き立つて唯 へ、天下の樂しみに後れて樂し 々感 慨 無 量と言ふ外はない。 出來ず、 紫金 <u></u> 山下に斃 と言つたが、 昭和 + れ 年 5 Ö れた 天下 十月頃詠まれた歌 Ø は 0 憂 返す返すも K 先つて 恆.

結

合し

た

大精

神

Ø

發露

の —

端

r

外ならぬと思はれる。

三たび四たび神は召せどもいかでわれ

事ねへぬまは行かじとぞ思ふ

÷

幸にも其の計 筆者は過ぐる七月末、 報は出發に先だつて達し、其の最後に間に合はざるのみならず、 先生の病篤しとの報に驚いて、急遽南京に赴かんと準備したのであるが、不 また其の死顔を拜する

事をも得なかつた。

電車 E 人 連 Ø て波も立たな 絡 の後、 死は天も亦これを惜んだのであらうか。 明石 かつた。 より辛じて汽車を獲、 恰度上 弦の 「 月 が 八月五日長崎 南空、 阪神の 大火 を出帆 のほとりに懸 地 を襲 i ふた風水害は鐵路 た Ø ŋ, である 太白は西 が、 を破壊 其 K 0 歲星 夜の 支 は 幾回 將 那 K 海 東天 ď は 寂 Ø

き星であつたが、 Ŀ. 海 に於ける研究所葬も終つて、八月十四 靜かな支那海の上、 大虚空の中に、 日私は能田、 大機院殿宙寶元剛大居士の靈は今何 今井兩君と共に南京に向つた。 車窓 處 にありや。 ょ り見

に昇らんとする時。

月も大火も太白もそして蔵星も、

思へば皆亡き人の愛した星であり、

吏

た因

縁深

る茫 々たる中支の平原は見渡す限り豊饒なる米作であり、 雨後稍や水嵩を増した沼澤には可 憐な水蓮

德

遊 Ø 近ぶ支那 花 ゕ゚ 咲 の子 き亂 供 れ て居 の群 を見る る。 戰 K 鬭 つけても、 0 過ぎ去 0 た中 大機院殿 支一 帶に Ø 靈魂 再びなごや が 東 洋 Ö 平和 * な治安が を守つて居るやうに 訪 れて、 嬉 K として 烕 4 5

<u>=</u>

戰 Ü よし か は あ れどもやがてま 70

手 を提 へて行 かんとぞ思ふ

ح ħ は先生が事變勃發直後に詠まれた歌であるが、 此 の希望のなる可く速く實現せんことを祈

17 を 一残つて 訪 -五 れ た H が、 居る 約 0 正 義皇 た 胩 間 軍 內 の餘暇を利 部 の攻 Ø 諸觀 擊 精 測 神に文化を愛する 用して、 器 械 が 無慘亂 陸軍特務機關の厚意による自動 暴 細心の ĸ 奪取 注意が 運び去られ 拂はれた た跡 を目 もの 車 を驅つて か、 擊 して、 天文 南京城外紫金 支那 臺の 建 人 物 0 は 誤 てる Ш 全 頂

頀 抗 0 は、 整 頓 意 完 日 識 本の 全さが、 が か .くも 學者が身 佛 非 蘭西 文化 を挺してこれ 的 人 を威嘆 である 也 * 'n ĸ U 当ら め __ たと言ふ話などと思ひ較べると、 驚した。 ね ば な 5 嘗て獨逸軍退去 à と言ふ意見も恐らくは、 後 Ø ス 新 城 ス 博 ブ か 士 jν グ 0 1 る 大學 ---光景 支 那 內 を眼* 文 化 諸 の保 設 Ø あ 備

ŀ

ラ

Ø

日

た り見 られて感ぜられ た事 か B 知 れ な ťβ

國 < 陸軍 天際 南 京 城 の精鋭、 に流れて、 外の 郊 戰 野 車、 偉 には 風 砲列整然として將に出動直前の姿にあるかに見えた。 堂 漸く秋色が加らんとする。 々我が帝國 海軍 |の艨艟 は纜 晴れ渡つた紺青の空の下に、 を連ねて浮んでゐる。 叉南 聖戰の 京城 赤褐色の長江は 中 Ø 心地 內 外に 0 一个將 は 我 に武 水 が 帝 遠

漢三鎭に 移らんとするの日、 南京城を訪れる可き平和を待たん心か、 延々として連なる城壁の外、 玄

武湖 上綠 色一面 Ø 蓮にはまだ點 々として白い 遅咲きの 花が ~見られ

干戈を執 つて 戰 つた 武 人の 勳 功は改めて言ふ迄もあるま

ķΞ

古 來 靑 史 誰

不

見

見

功

名

朥

古

人

新城博士亡き後に、 筆墨を執 つて東洋永遠の平 和の爲めに戰ふ科學の戰士は誰

博士 八月二十一日 が ~遺され 12 2雜記帳 急遽歸洛した筆者は、 の頁をめくつて ゐ 同 たが、 日 相 國 一寺で執行 その 中 行 に三月十四 せられ to 日海 葬儀終了後、 外放送 原稿 三たび感 『支那 慨 Ø 文 ĸ 化 耽 つて故

が、 と思はれる)放送せられた時の腹案で、 て』と言ふのを發見した。 先生の對支文化に對する考への一端を覗ふに役立つやうに思はれるので、 原稿と言つても單に筋害 先生の文章として茲に紹介するわけにも行 的 のもので、 上海から (用語: 若干補筆して私の は英 かないやうである 語 で あつ た 'n 拙文 たらう 對

۲.

とを豫

ВĎ

斷

つ Ę

置く。

0 最 が後を 飾 らうと思ふが、 論旨 Ø 連絡に不備の點が あるならば、 其の 責は筆者に あ Ó 7 先 生 R は 無 垂

二四四

کھر 私 Ø は は 九三 H 本 が 五 受取る團匪賠償金 年 以 來滿三ヶ年上海自然科學研究所の所長をして居ります。 Ø 部によつて經營されて居る日支間の國 際的純學術 上海自然科學研究所とい 的 研 究所で、

ありますが、 九三一年より開所し、 年額經 費約五十萬圓を費して居ります。今日まで既に相當 研究方面は純粹理科と基礎醫學で、 研究員は約四十名、 の研究成績を擧げ、 内約十名は それ 支那人で

和漢文と歐米文との二

一種の出

版物として發表

Ļ

關係學界に廣く

寄贈して居ります。

終熄せ 態 を引き起すまで 此 度 んことを望んで止まな Ø H 支事 變 K は、 至 0 日 た 本と支那とが一層深く提 Ъ (v) Ø と思は のでありますが、 れ 之れ は誠 現 携 K K して進まんとして却 多く 悲 ī の支那 彭可 き の學者 事 で、 は事 私 て は 變 胩 ゕ Ø 的 7 た る K め 舭 は K 態 相 深 0 反 抗 Ż 内 H L 地 も 戰 卓く 爭 K

引

狀

は

退したために き打撃を蒙りつゝあるのは遺憾の至りに堪へませ 大多數の 支那 の研究所及び大學は事實上殆んど全く停止 為。 私は事變後直ちに、 の狀態に陷 北京、 ŋ 上海 文化發展 附 近 南 上 甚だ たが、 京

化 其 抗 の他・ 州等 施 設 は相 上 を視察しましたが、 海 附近、 當の損害を受け、 南京、 抗州等 北京は幸にして市街戰がなか 或は圖 は 何れも或は支那軍 青、 器 械類、 或は學者が多年 隊 の駐屯の 0 ために、 た の心血 め、 直接 或 をそ は一 の被害を受けませ 般民衆の ٧ ϵ_{J} で蒐 集し 掠 奪の ぬで た 貴重 た L め を標 K

文

本 現場に於て、 ります。 類などが甚だしく散亂し泥靴に蹈みにじられつゝあるのは同學の友として見るに忍びない次第であ 私は取敢へず直ちに我が研究所の專門研究員を派遣し、 或は相當の場所に此れ等を集めて暫時的に保管するの途を講じましたが、 軍部方面と協議して、 是事 それ はやがて 或 は

支那文化復興の際に重要な要素となる可きものであると信じます。

我 が 私 の仕 研究所は其の 事はただに支那學者が殘していつた文化施設を保護管理するのみには止らないのであります。 性質上、 日支間 .の國際的研究所であるにも係らず、 從來の國 民政府 は動もすれ r

入 所 政 し か が、 き政 府 ŋ 7 根本 る關 の諒解を得て、 ح 權 的 れ が 係を認めざらんとする態度を持しましたがために、 等 或 研究に從事することに對し支障が少なくなかつたのでありますが、 してゐる我が研究所 Ø は大學や研究所 文化施設に 本來 の目 對 し 的に向つて突進しなければならぬと思ひます。 を設け、 7 の責任であると考へて居ります。 相當 0 或は中等、 助 場言と援 助とを申 初等 Ö 敎 し出 育 Ø 支那の學者と提携して深く支那 じづる事 施設を考案するに は多年支那 或は更に 此度 當つて の學界に の事 變後 步 Ą, 對 查 我 進 は Ø し 相 内 め、 新 が 研 當 地 究 新 ぎ

0

H K |本軍 ある なほ 部 最後に臨 の特別 墟 の地 み、 Ø 域、 注意によつて完全に保護されて居ることで、是れ等は東洋文化發揚 山 此 東曲 Ø 機會に 阜にある孔子廟の 一言したい のは北京 一帶、 山西省大同にある六朝時代の石佛 の南方周口 店にある北京人の遺蹟、 Ö のために 遺蹟 河南 等 彰 深く感 が 德 我が 附近

地

步

を

獲

得

謝すべきことと思ひます。

免れんがために持ち去つたものとのみ善意に解釋し得ざる實例があり、日本人の手に委ぬることを避 械などは其の實例でありますが、これは必ずしも學術に理解なき兵士の手によりて毀損されることを 分を取り外して持ち去つたことで、紫金山天文臺の天文觀測器械や南京北極閣氣象臺に於ける地震器 これと對照して、私が甚だ遺憾に思ひますのは、支那の學者が退去するに當つて器械類の重要な部

けんとする單なる敵愾心に基いたものと認めざるを得ないのを甚だ遺憾とします。(下略)』

(一九三八·八·二八稿)